

スタインベック文学展望

——1920年代の源流を探る——

加藤好文

はじめに

スタインベック (John Steinbeck 1902-68) の約 40 年に亙る作家活動を検証する上で、作品に対する読者の評価で一つの区切りを付すとすれば、1939 年の『怒りのぶどう』を分水嶺として上昇期の前半と下降期の後半とに区分することは可能であろう。あるいは『怒りのぶどう』ほどに高い山脈ではないにしても、それなりの高さを誇る山々がその前後にも相連なる（もちろん谷間も散見されるが）なだらかな曲線を描いていると言えるかも知れない。筆者としては、むしろ後者の立場に立って、これまでアメリカ文学に占めるスタインベック文学の意義を作品毎に検証してきた。さらに最近では、彼の作品及び彼自身がアメリカの社会や歴史、文化とどのように関わっているかを考察しているところである。そのような方向性からして、敢えて彼の作家活動に節目を入れるとするならば、それぞれの時代との関わりの中で、彼の創作態度や作品に取り上げられた素材がどのように変化しているかに着目するのが有益であろう。その結論として、彼の作家人生を大きくは三期に区分するのが一応妥当な線かと思われる。すなわち、第一期は第一次世界大戦直後から 30 年代前半にかけて、独自の創作方法を模索しながら様々なテーマで作品執筆を試みた作家修行時代である。第二期は 30 年代後半から 40 年代半ばに至る、不況と第二次世界大戦で混乱した社会に積極的にコミットするかもしれないそのような社会を強く意識した、

リアリスティックな執筆活動を精力的に展開した時期に当たる。そして第三期は40年代後半以降、アメリカ人のモラルの問題を中心にして、戦後の豊かなアメリカ社会が抱える諸問題を多角的な視座から捉えようとした時期である。もちろん、これをさらに細分することもできれば、その他の物差しによる異なった見方も可能であろうが、筆者としてはこの区分を前提としておきたい。

その上で本論では、スタインベック文学の源流とも言える彼の青春時代の作品を中心にして、後の作品に繋がるその特徴的傾向について考察してみたい。この第一期は、概して作品が未熟なことや関係資料が不足していることなどから、あまり研究成果は上がっていないように思われる。しかしこの時期スタインベックは一人前の作家を目指し、大きくはロマンティックな作風に傾斜しつつも、様々な題材を駆使して、ストーリーの信憑性を高めるべく作中での視点の移動や作者と作品との距離の置き方に工夫を凝らすなどしながら、次々と野心的試作品を生み出したのである。そしてそのような実験から醸成された彼の特質が後の主要作品に発展継承されていることは否めない事実であろう。そのような意味からも、スタインベック文学の全貌を見極めるためには、未だ未開拓の領域を多く残している特に1920年代の作品に光を当てて、まずその内容的特徴を確認しておくことが欠かせないのである。

I

最初に、先述の区分に基づいて、スタインベックの創作活動の全体的な流れを概観しておきたい。スタインベックは子供の頃よりヨーロッパの空想的・幻想的な物語を中心に読書に耽るかたわら、高校生の頃からは自らもそのようなロマンティックな傾向の作品を書き始めている。そして故郷サリーナスの高校からスタンフォード大学に進学したのも、親元を離れて作家になる夢を育み、実現させたいという彼なりの野心の表れと見ることができる。実際、堅実な職業に就くためのステップと考えた両親の期待とは裏腹に、彼にとって大学それ自体は言わば隠れ蓑に過ぎず、彼は文学関係の科目を中心に受講し、さらに文

学愛好者の集まりである「英語クラブ」では文学談義に花を咲かせつつ創作の修行に励み、また当時の流行であり後の彼の作品に大きな影響を及ぼすことにもなる生物学に興味を示したりもした。学外では、学費を稼ぐ必要から、肉体労働をはじめ様々な仕事を経験したのであった。大学生生活を作家修行の場とみなしていた彼にとって、その歳月が後の創作活動に繋がる貴重な体験となったことは言うまでもないであろう。このような経験を糧にして、彼は1920年代、詩や短編を書くことに没頭したのである。その成果の一端が、30年代前半、連作短編集の『天の牧場』(1932)や、長編小説『知られざる神に』(1933)に垣間見える。なお、短編集『長い谷間』(1938)は主に1934年頃に書かれたものだが、一部20年代に書かれたものも含まれているし、また内容的にも第一期と第二期とにまたがっているとと言える。

ところで30年代前半は、上述のように20年代の残像を留めながらも、アメリカ社会の不況風が作品の構想に影響を及ぼし始めた時期と言って差し支えないだろう。またこの時期、1930年とされているが、海洋生物学者のリケッツと知り合ったことも手伝って、スタインベックは次第に科学的、客観的な物の見方も身につけていったのである。その意味で、この期間は第一期と第二期とがぶつかり合う、言わば潮の目に当たるともみなすことができよう。このような中で彼は、当時の資本主義体制の歪みから、言わば社会の底辺で悲喜こもごもの生活を送る人々の実態を、一定の距離を保ちながら観察する手法を取り始めたように思われる。社会を強く意識し個人よりも集団に重点を置いた創作態度は、特に世間の注目を浴びることになった『トーティヤ・フラット』(1935)をはじめ、『疑わしき戦い』(1936)、『二十日ねずみと人間』(1937)、『怒りのぶどう』など30年代後半の作品群、さらに『キャナリー・ロウ』(1945)を含む第二次世界大戦の影響を受けた40年代前半の諸作品によく反映されている。第二期に当たるこの10年間のスタインベックの視座は、大仰な言い方をすれば、自由と平等あるいは機会の均等を標榜するアメリカン・ドリームの基本理念にメスを入れるものである。尤も作品の枠組みから見れば、作者の視点はアメリカ社会の既成の体制下にあり、描かれる対象も主に下層民に限定されたものではあ

るが、その根底には、人種、民族、性別、ステイタスの違いを越えて、対等な人間としてその尊厳を尊ぶアメリカ民主主義の精神を擁護しようとする作者の基本姿勢を読み取ることができるように思われる。

しかしその間にも、同時進行的に第三期との潮の目の時を迎えていることも看過できない。すなわち『コルテスの海』(1941)によって、スタインベックは資本主義体制の矛盾を露呈したアメリカ的環境を離れてメキシコのゆったりとした時間の流れに身を浸し、人間と自然との不可分の関係を実感として再認識することになる。こうした中で、40年代後半以降、彼は戦後の平和と繁栄を謳歌するアメリカ社会における様々な価値観の変化に注目し、とりわけ若者たちのモラルの低下に憂慮の念を示す方向へと創作を展開していくことになるのである。その結果、彼は『真珠』(1947)や『エデンの東』(1952)、『我らが不満の冬』(1961)、『チャーリーとの旅』(1962)、『アメリカとアメリカ人』(1966)などを著して、個人のモラルに焦点を当て、さらには環境と人間との調和を重視する傾向を強めていったのである。すなわち金銭万能、人間中心の現代社会にあって、寓話的手法を用いたり、聖書なども下敷きにしなが、人間の個人としての存在をその心の面から見つめ直し、アメリカ社会の「発展」に警鐘を鳴らしたのである。

以上のような創作活動史の中でも、特に作品が注目されるようになった30年代半ば以降の創作態度を眺めてみると、彼はアメリカ社会における個人と集団との関係を作品化するに当たり、時代の動きを敏感にキャッチして、まず考察対象の重心を集団に置き、その後さらに個人へと移動させている。このような焦点の移動は、50年代半ば、彼が人間の二重存在説を唱え、その順序は集団的存在を全うして初めて個人として十分な存在たりえるのだと述べているが、そのような考えに奇しくも一致したものになっている²⁾。彼の人間観と創作方法の符合は、鋭敏な感覚でもって描写対象の照準を時代の流れに的確に合わせ、社会の一員としての人間の本質を複眼的に捉えようとした姿勢の表れと言えよう。

II

さて、上述したような第二期以降に繋がる源流としての第一期にはどのような特徴が見られるだろうか。繰り返しになるが、スタインベックの青春期は主にロマンティックな内容の作品執筆を中心にしながら、様々な創作方法を模索した時期で、それが後の諸作品の誕生へと繋がったのであり、その意味からも重要な時期であることに変わりはない。当時の作品内容を簡潔に要約するならば、やや観念の先走りとのそしりは免れないものの、個人の英雄的行為とその悲劇的結末を語ることを一つの特徴としている。例えば先述の『天の牧場』(*The Pastures of Heaven*)は、シャーウッド・アンドラソンの『ワインズバーグ・オハイオ』(1919)を意識した形式ではあるが、カリフォルニアの一地域を舞台にして住人たちの夢と現実がその地に巣くう「呪い」との接触の中で織り成す個々人の物語集として、現実とも幻想ともつかない怪しい独特な雰囲気醸し出すことに成功している。また、『知られざる神に』(*To a God Unknown*)はアメリカの自然界が有する巨大なエネルギーをカリフォルニアの旱魃という自然現象に収斂させて、その地に生活の砦を築こうとする一人の人間の極限的な闘いを描出したものである。このように30年代前半の両作品は、アメリカの西部、カリフォルニアという「場所」が「西への夢」すなわち「成功の夢」というアメリカ独特のイメージを読者に喚起させる一方、ストーリーの非現実性とのギャップ故に作品全体にアイロニーが生まれ、その結果アメリカ(人)に対する読者の想像力を一層かき立てるものとなり得ている。

一方、時代を溯って20年代中頃に書かれた最も初期の短編は、緻密な構成に欠けるものが多く、習作の域を出るものではないが、それでも当時のスタインベックの関心の対象を知る上でも、また後の作品との関係からも看過できないであろう。特に、タイプ原稿のまま大学図書館に眠っていてまだあまり研究の進んでいない、未出版の短編の中に興味深い特徴を見て取ることができる³⁾。それらは、物語の舞台と背景の点から言えば、「東三番通り」(“East Third Street”, 1924-26)、「十四番街の白い尼僧」(“The White Sister of Fourteenth Street”,

1924-26)、「ニンフとイゾベル」(“The Nymph and Isobel”, 1924-26) など、ニューヨークと思しき都会に住む下層民を主人公にしたもの、また「長い沼の日々」(“The Days of Long Marsh”, 1924-26) のように不気味さの漂うカリフォルニアの片田舎を舞台にしたもの、さらに「鉄の釘」(“The Nail”, 1924-26) のように旧約聖書に題材を得てカナンの地を舞台にしたものに区分されよう。そして注目すべきテーマとしては、このような都会や田舎に住む人間の臆病さや孤独などが挙げられるが、もう一つ見逃せないものとして、男性と女性との相違や相互理解のいたらなさから起こる悲劇という問題も含まれているように思われる。例えば、「十四番街の白い尼僧」では芸術(オペラ)に対する理解の有無を理由に別れることになる男女が描かれ、また「長い沼の日々」は、老人が昔、血縁者との間で不義を犯した妻を、その相手の男共々、死に至らしめたことを暗示するような筋立てで、『長い谷間』中の短編「殺人」を想起させるものがある。さらに「鉄の釘」では信用した女性に裏切られて殺される男が描かれている。このような題材やテーマはいずれも後の作品に活かされ発展を見る重要なものである。

こうした中で、1927年に発表された短編「アイバンの贈り物」(“The Gifts of Iban”) は初めて一般の商業雑誌に掲載されたもので、ここに至ってスタインベックは一人の作家としてその産声を上げたことになる。この作品の中には、それまでに培われた彼の創作態度を如実に示す要素が含まれている。すなわち、物語は森を舞台にファンタジーとアレゴリーに彩られロマンティックな雰囲気を含んでいるが、その中に、自然美と金銭欲との狭間であってそれらの評価を巡って対立する男女の姿を見て取ることができる。そして最後は、主人公の男性は無理解な女性との別れという結末を迎えることになるが、これは物語作りに情熱を傾けるスタインベック自身とも重なる点があるように思われる。それは、特に20年代、彼が自らの置かれた立場や状況を強く意識しながら創作活動を行ったことを示唆するものであり、その必然的産物と言えるであろう。

III

さてここからは、20年代の最後を飾る『黄金の杯』(*Cup of Gold*, 1929)を詳しく見ていくことにしたい。確かに、この作品はそれ自体の完成度は十分なものとは言えず、一般の評価も決して高くはない。しかし20年代を通して短編を書き散らしながら作家修行を積んだスタインベックにとっての記念すべき長編第一作であってみれば、この作品に賭けた彼の意気込みと期待のほどは容易に察しのつくところであろう。彼の努力の成果の程と、彼個人の心の内を、その中に探ってみるのもあながち無意味とは言えない⁴⁾。

それでは、『黄金の杯』はどのような特徴を有しているだろうか。結論から言えば、基本的には先述の20年代の全般的流れを踏襲した作品である。副題が *A Life of Henry Morgan, Buccaneer with Occasional Reference to History* と付されているところからも推察されるように実在したヘンリー・モーガン(1635-1688)という海賊をモデルにしながらも、内実はロマンティシズムの香りが強く、しかも自伝的色彩の濃い物語とも言える⁵⁾。すなわち、冒険を求めて故郷を飛び出すモーガンは、一人前の作家を目指して奮闘する当時のひたむきなスタインベック自身の姿に容易に重なるのである。従って我々読者は、作品中でモーガンが辿る人生の軌跡にスタインベックの作家人生の一端を読み込みたい誘惑を抑えることは難しいように思われる。

事実上、ウェールズ出身のモーガンは西インド諸島を中心に海賊として活躍し、特に強大な軍事力を誇るスペイン軍を打ち破ってパナマを占領したことで一躍名を馳せた人物である。そして最後はイギリス国王よりナイトの称号を授けられ、ジャマイカの副総督として一生を終えたとされている (*Americana*, 451-452)。このような史実をもとに、虚構化された作品では15歳になったモーガンがウェールズの間山々に囲まれた暮らしに息苦しさを覚え、広い世界へ出てみたいという止むに止まれぬ欲求を抱いたという設定になっている。彼は両親の心配や寂しさをよそに、カーディフを出港し数々の困難を克服した後、上述したような事実上の成功を手中に収めるのである。要するに、アーサー王伝説

よろしく、聖杯探求物語の「海賊版」と言えよう。折しも 1920 年代、ハリウッドの娯楽映画として痛快な冒険物語が求められた時代でもあり、この作品が難攻不落とされたパナマ攻略のシーンをクライマックスとしてハリウッド映画の要件を満たしていることは確かである (Lisca 27)。

だが、このような史実に則った海賊映画向きの筋立ては表面的なものであって、作者の真のねらいは、モーガンという一人の英雄の名を借りて、ひたむきに夢や理想を追う人間の内実、その孤独な内面を覗いてみることにあったように思われる。その意味でフィッツジェラルドの『偉大なギャツビー』(1925)を連想させもするだろう (French 31-38)。ただ、この作品は観念が先行し、言葉が十分に定着していない点は否めない。スタインバックが 20 代半ばに執筆していた未完の作品を無理をしてこの長編に仕上げたこともあって、確かに人物は深みに欠け、ストーリーの展開も十分な説得力を備えたものになり得ていないかも知れない⁹⁾。しかしそれでも、20 年代のきらびやかな世相を意識した外面部分とは裏腹に暗い蔭を宿す内面に光を当てようとした、作者の意欲のほどは十分に伝わってくるのである。中でも、彼の創作上の特徴でもある、人間の夢と孤独、男女の隔たりから起こる悲劇などのモチーフをここに読み取ることは可能である。作中に登場する予言者マーリンはモーガンに向かって次のように言う。

“You are a little boy. You want the moon to drink from as a golden cup ; and so, it is very likely that you will become a great man—if only you remain a little child.... You will come to your greatness, and it may be in time you will be alone in your greatness and no friend anywhere ; only those who hold you in respect or fear or awe. I am sorry for you, boy with the straight, clear eyes which look upward longingly. I am sorry for you, and—Mother Heaven! how I envy you.”⁷⁾

ここにはモーガンの将来を予示する内容が込められている。マーリンは、モー

ガンに若き日の自分の姿を見て羨望の念を禁じ得ないが、同時に同情心を覚えていることは看過できない。モーガンの求める「偉大さ」の中に「孤独」があることを見越しているからである。さらにマーリンの言葉ではないが、物語結末近くの“Folly and distorted vision are the foundations of greatness”(250)という一文から推察されるように、モーガンの行動の推進力は「愚行」と「歪んだものの見方」と言うこともできるであろう。自己中心的な子供が現実拘泥することなく、心のおもむくままに願望成就に向かってひた走る姿を想像してみればいい。裏を返せば、モーガンによる「偉大さ」の追求とは、人が子供から大人になる一過程であり、自己を見つめ発見する道程と言えるのかも知れない。ただしこの作品の場合、結局のところ、それはモーガンの成長というよりは、作家スタインベックの成長という穿った見方もできるだろう。モーガン自身はむしろこのような負の要因に呪縛されて一生を終える運命を背負わされた人物でしかないのだから。

ところで、モーガンの華やかな行動の裏側、すなわち彼の愚かさや孤独を知るには、作品中に頻出する女性描写に注目してみるのも有益なことのようと思われる。彼の人生に関与する女性が三人登場する。まず第一は、ウェールズの故郷カンブリアにいる幼なじみのエリザベスである。物語の冒頭近くで、彼女は髪の毛の黄色い少女で、みすばらしい小屋に住む貧しい小作人の娘と描写されている。しかし、“a desire for a thing he could not name”(5)と説明されるころの、モーガンを内奥から駆り立てる未知なるものに対する探求力の前で、このような彼女の実像が次第に変容されていくのである。その遠因は、彼が故郷を出奔するに当たり、マーリンの助言にもかかわらず、エリザベスの姿を遠くから眺めるだけで実際に別れの言葉をかけることもできなかったことにあると思われる。そこに、思春期を迎え、異性を意識し始めた少年のデリケートな心理状態を見て取ることができる。しかもその中には、一般的なこととして、眼前にある理解できない不可解なもの、自己を不安にさせるものを避けようとする意識が働いていることも確かであろう。つまり現下のモーガンにとっては、わき目もふらず前進するひたむきさこそがすべてなのであって、現実を理解し

斟酌するための逡巡の時ではないのである。だが彼はエリザベスの実像に相對することを拒んだことにより、裏を返せば自己との對話を回避したことにより、却ってその後妄想をたくましくし、彼女がその姿形を変えて彼に纏わり付くことになったと解釈できないだろうか。彼は彼女の虚像を膨らまし現実の姿から遊離する度合いが大きくなる分、皮肉にも精神的不安定さ、孤独さも増幅されていくのである。

モーガンの口をついて出るエリザベスの姿が次第に大きく変身している様子を具体的に見てみよう。先述した等身大のエリザベスとの別れのシーンが、カーディフを出港するに際しては、“Her hair was gold...She cried and cried for me to stay...”(57)と潤色され、次に、年季契約奴隷の身ながら念願の西インド諸島に渡った折には、自らは強引に仲を裂かれた悲劇の男となり、一方エリザベスは“the daughter of a wealthy squire”(95)と脚色される。さらに、彼がついに海賊の首領として君臨すると、彼女も“an Earl’s daughter”(132)へと昇進している。そして最後、ナイトの称号を与えられ、ジャマイカの副総督に任じられたイギリス国王の面前では、彼女は“a little princess of France”(248)の虚冠を被せられもする。尤も、そのような歴然たる嘘が国王の嘲笑を買い、一層彼の愚かさを露呈することになるのであるが。このように、彼は物質及び権力の獲得という世俗的レベルの階段を昇るにつれて、エリザベスをそのような自分にふさわしい幻の理想的女性へと変容させていくのである。こうして彼は自分自身をだまし、虚像を拡大することによって逆に精神的摩滅を起こしていくことになる。言い換えれば、孤独を恐れて女性の幻影にすがること、結局彼は自らをいびつな存在へと追いやっていくことになるのである。

このようなモーガンは、第二の女性の出現によって決定的敗北を喫することになる。それは、彼が孤独の解消、「偉大さ」の究極目標として、パナマを攻略する最大の動機ともなった噂の女性ラ・サンタ・ロハ(レッド・セイント)との出会いである。その場面において、彼は“there was a real woman before him, not the wraith-like Elizabeth”(193)と反応し、一方、彼女の方も“you are no realist at all, but only a bungling romancer”(196)と述べているように、結局

彼が追い求めたものは現実に存在する生身の女性ではなく、心に描くエリザベスのように実体を伴わない幻に他ならなかったのである。モーガンの生涯は、“real woman”と接触せず、遠くから眺めただけの原型としての幼いエリザベス像を心の奥深くに宿しながらも、肥大化した虚像としてのエリザベスを前面にかつぎ出すことで「偉大な人間」の階段を昇ることにあったと言えるであろう。彼が自己の愚かさを思い知る象徴的な描写がある。

Henry Morgan lifted a golden cup from the heap of loot. It was a lovely, slender chalice with long curved handles and a rim of silver. Around its outer edge four grotesque lambs chased each other, and inside, on the bottom, a naked girl lifted her arms in sensual ecstasy. The captain turned the cup in his hands. Then, suddenly, he hurled it at a little fiery pyramid of diamonds. (205)

聖杯の外縁で不毛な追い駆けっこを演じるグロテスクな子羊像は、まさに虚飾のエリザベスの幻想に憑かれていびつに変形したモーガン自身の姿であろう。

(4匹の子羊像は、モーガンによる先述の4度の虚言を象徴しているのかも知れない。)そしてそのような像が全く入り込めない位置である聖杯の内側に、生々しいラ・サンタ・ロハ的女性の像が裸身を晒している。このようにその場に言わば封印されてその軌道から脱け出せないグロテスクな像と、その像が決して覗き得ない内部世界に幽閉されたセンシユアルな女性像とを合わせて眺めてみて、モーガンは瞬時にして自己を知ると同時に自己と乖離した世間の実相をも察知したのであろう。それ故に彼はにがにがしい思いでその聖杯を投げ捨てたのである。

物質的成功と名声は不動のものとなったにもかかわらず、彼は深く内省せざるを得ない。

His eyes, those peering eyes which had looked out over a living horizon,

were turned inward. He had been looking at himself, looking perplexedly at Henry Morgan...(217)

ここには、目標を失って自信をなくし当惑するモーガンの姿が描かれている。さらに冒頭でマーリンが予言したことの結末は、ラ・サンタ・ロハによって“the brave, brutal child in you is dead”(221)と最後通牒を突き付けられることになる。子供の死とは、結局孤独に耐え切れず、「偉大さ」を求める冒険に幕を降ろすことに他ならない。その代償としてモーガンも、マーリンが自認していたところの「凡庸」に足を踏み入れたことは間違いないであろうが、最終的にモーガンが望んだ「心の平安」を得ることはできたであろうか。その答えは第三の女性の存在と関わっている。

この最後の女性は、同じくエリザベスという名前だが、かつてジャマイカの副総督でもあった亡き叔父の娘として登場する。モーガンは最終的に彼女と結婚し、海賊稼業と縁を切り、ジャマイカの副総督としてその地で余生を送ることになる。そこでは、“I have lost my unnamable desires”(241)と自ら認めているように、彼はひたむきな冒険心を失い、妻にも肯定的価値を見出せないまま無為な生活に甘んじている。“Civilization will split up a character, and he who refuses to split goes under.”(255)という名言からも推察できるように、彼は社会に順応するための奇弁を弄して自己の正当化を図るのである。従って、彼にとって彼女は世間体を繕うための単なる飾りものでしかないと言えよう。魂の抜け殻同然の彼には、先の二人の女性の影響力に比べれば、妻の存在意義は微々たるものでしかない。しかしモーガン最期の場面だけは注目に値するであろう。彼は臨終の間際になって初めて、眼前の彼女の目を通して、「この女性が自分を愛している」ことに気づくからである。

“Oh, my husband—Oh, Henry, my husband.”

He turned his head and looked at her curiously, and his gaze went deep into her eyes. Suddenly he was seized with despair.

“This woman loves me,” he said to himself. “This woman loves me, and I have never known it...”(261-262)

これまでモーガンは天空を仰いで前進するのみで、眼前の女性たちとまともに対峙してこなかったのであるが、すべての重荷を取り去った今、遅まきながらやっと妻の目にその心の内を読み取ったと言えよう。彼はこの時点で初めて「孤独」を忘れ、真の「心の平安」を得たのであろう。そして最後に、彼は心の中で、故郷出奔前の等身大のエリザベスと穏やかな気持ちで話を交わしつつ息を引き取る。それはすなわち、モーガンがここに至ってやっと自己と和解した瞬間と言えるのではないだろうか。そしてさらに比喩的な言い方をすれば、スタインベックも自己と折り合いをつけて、新たな視点で、新たな等身大のモーガンの人物を語る時を迎えたのではないだろうか。

お わ り に

以上見てきたように、スタインベックは第一期から第三期に至る創作活動を通じて、着実に創作方法や内容の広がりや深化を遂げていった。それには、それぞれの時期が交差する潮の目によって彼が作家として練磨され、豊かさを身につけたことも忘れてはならないだろう。そしてその源流を辿れば、1920年代に彼が創作に傾けたそのひたむきな情熱に注目せざるを得ないのである。そこには、故郷カリフォルニアの生活や創作修行に励んだニューヨークでの経験、そのような中での女性たちとの出会いなども含めて、当時の実体験を必死に創作に活かそうとした彼の真摯な姿が偲ばれるのである。そして彼は、作家を目指す青春期の自らの熱き思いを、各作品中のそれぞれの人物たちに託しつつ創作活動を精力的に展開したのであり、そこに着実な成長の跡を見ることができるのである。中でも『黄金の杯』によって、一人の英雄の活躍とその死を通して、人間の夢を描きその孤独な内面を照射することに概ね成功し得たことはこれまで見てきたとおりである。しかもそこには、作家自身が20年代の自己との

対峙そして惜別を語ろうとした形跡も読み取ることができる。このように、この作品は後に引き継がれる重要なテーマを前面に据えており、また作家個人が投影されてもおり、その意味からも作品自体の再評価がなされるべきことは言うまでもないであろう。

『黄金の杯』の一節に、モーガンの次のような台詞が目止まる。

I am filled with a nostalgia for my own black mountains and for the speech of my own people. I am drawn to sit in a deep veranda and to hear the talk of an old man I used to know...(222)

これは余生を故郷で過ごしたいという希望を吐露したものであろうが、結局モーガンは生きて故郷に帰ることはなかった。しかしスタインバックの「自伝的作品」という視点から言えば、これは故郷の山々や人々に対する思慕の念を募らせ、作家として彼らの声に耳を傾ける新たな時期の到来を示唆する言葉だと考えられる。その証拠に、スタインバックは30年代に入ると故郷カリフォルニアに腰を落ち着けて、先述した作品群の中に、実際その地に住む第二のマーリンやモーガンの両親たちをも太い筆致で刻印していくことになるのである。このような意味からも、この『黄金の杯』はスタインバックの20年代と30年代を繋ぐ重要な位置を占める作品ということができるのである。

注

- 1) 特に、スタインバックの青春時代に関して本論で言及していない点については(また、重複部分も含めて)、詳しくは拙著「スタインバック青春期の短編小説」を参照されたい。
- 2) スタインバックは1955年5月28日付の *The Saturday Review* の中で次のように述べている。“I believe that man is a double thing—a group animal and at the same time an individual. And it occurs to me that he cannot successfully be the second until he has fulfilled the first.”
- 3) これら未出版の短編原稿——ハーバード大学ホートン・ライブラリー所蔵のもの (shelf

mark, fMS Am 1190), 及びスタンフォード大学図書館スペシャル・コレクション部所蔵のものへの言及に際しては、それぞれの許可を得て行った。両大学関係者のご好意に感謝申し上げたい。

- 4) 『黄金の杯』に関する詳細な作品解釈については、拙著「ヘンリー・モーガンの冒険——誘引と反発のダイナミズム」を参照されたい。
- 5) Joseph Fontenroseは、虚構と史実の割合は9：1と指摘している。
- 6) Martha Heasley Coxの『*Cup of Gold* 論』は、*Cup of Gold*の成立過程や、多様な読み、諸批評などについて詳細に論じていて参考になる。
- 7) John Steinbeck, *Cup of Gold: A Life of Henry Morgan, Buccaneer with Occasional Reference to History.* (*The Complete Works of John Steinbeck* Vol. I. Ed. Yasuo Hashiguchi. Kyoto: Rinsen, 1985) pp. 27-28. 以下、*Cup of Gold*からの引用はすべてこの版からであり、頁数は引用に続けて括弧に入れて示す。

Works Cited

- Benson, Jackson J. *The True Adventures of John Steinbeck, Writer.* London: Heinemann, 1984.
- Bloom, Harold. *John Steinbeck.* New York: Chelsea House, 1987. 70-73.
- Cox, Martha Heasley. *Steinbeck's Cup of Gold. (A Study Guide to Steinbeck, Part II.* Ed. Tetsumaro Hayashi. Metuchen: Scarecrow, 1979), 19-45.
- Fontenrose, Joseph. *John Steinbeck: An Introduction and Interpretation.* New York: Holt, Rinehart and Winston, 1963. 7-13.
- French, Warren. *John Steinbeck.* New Haven: C & U, 1961. 31-38.
- Hughes, R. S. *Beyond The Red Pony: A Reader's Companion to Steinbeck's Complete Short Stories.* Metuchen: Scarecrow, 1987.
- Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck.* New Brunswick: Rutgers U, 1958. 21-38.
- Steinbeck, John. "The Days of Long Marsh." TS. (AL 3523. 20. 16.) Cambridge: The Houghton Library, Harvard U, 1941.
- . "East Third Street." TS. (AL 3523. 20. 21.) Cambridge: The Houghton Library, Harvard U, 1941.
- . "The Nail." TS. (AL 3523. 20. 58.) Cambridge: The Houghton Library, Harvard U, 1941.

- . “The Nymph and Isobel.” TS. (AL 3523. 20. 62.) Cambridge: The Houghton Library, Harvard U, 1941.
- . “The White Sister of Fourteenth Street.” TS. Stanford: Department of Special Collections, Stanford University Libraries.
- . “The Gifts of Iban.” *Uncollected Stories of John Steinbeck*. Ed. Kiyoshi Nakayama. Tokyo: Nan'un do, 1986.
- . *Cup of Gold: A Life of Henry Morgan, Buccaneer with Occasional Reference to History*. (*The Complete Works of John Steinbeck* Vol. I. Ed. Yasuo Hashiguchi.), Kyoto: Rinsen, 1985.
- . *The Pastures of Heaven*. (*The Complete Works of John Steinbeck* Vol. II. Ed. Yasuo Hashiguchi.), Kyoto: Rinsen, 1985.
- . *To a God Unknown*. (*The Complete Works of John Steinbeck* Vol. III. Ed. Yasuo Hashiguchi.), Kyoto: Rinsen, 1985.
- . “Some Thoughts on Juvenile Delinquency.” *The Saturday Review* Vol. 37. May 28, 1955.
- . *Steinbeck: A Life in Letters*. Ed. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten. London: Heinemann, 1975.
- The Encyclopedia Americana* Vol.19, Danbury: Americana Corporation, 1980.
- 加藤好文「ヘンリー・モーガンの冒険——誘引と反発のダイナミズム」(『大分大学経済論集』第33巻第4号), 1981。
- 加藤好文・加藤光男「スタインベック青春期の短編小説」(『札幌大学外国語学部紀要 文化と言語』第51号), 1999。